



ヒヤシンス姫 ミュシャ

イギリス人デザイナーのウィリアム・モリスの、繊細さと素朴さがミックスした几帳面さで描かれた草花柄の生地を見た時、アール・ヌーボーというアートのジャンルを知りました。素敵だなと感じましたが、装飾的、平面的、様式的、商業的だとも思いました。同時代の後期印象派とはとても違っています。リトグラフや印刷技術でアートが大衆のものになったのでしょうか。アール・ヌーボーというアートに触れる度に、ポッティチェリの絵のような流麗な美女が、美しい枠の中に描かれているポスターを見かける事が多く、惹かれる思いになりました。その絵がアルフォンス・ミュシャ(1860-1939)というチェコ出身の画家の作品であると今回初めて知りました。

国立新美術館の最初の3室には、縦6m、横8mの大きな絵がそれぞれ6~7枚が掛けられていて、圧倒されました。見慣れた「綺麗なカード」のような絵ではなく、これがあの画家の絵？と驚いてしまいました。全く知りませんでした。これらの絵はプラハ市立美術館所蔵の「スラブ叙事詩」という全20点で、国外では初公開の、ミュシャの晩年の渾身の作品であると紹介されていました。



原故郷のスラブ民族



スラブ式典の導入



スラブ民族の賛歌

ミュシャの「スラブ叙事詩」は「リーダーと民」の歩みを感じさせます。そのリーダーとは10世紀以降、チェコ民族の誇りを持って外圧と戦い、基礎を築いた諸王であり、特に15世紀の宗教改革者ヤン・フス(1370?-1415)です。フスはルターより100年も前にカトリック教会の腐敗に対し、聖書だけ

を信仰の根拠と主張したため、破門され、火あぶりにより殉教した神学者です。このフスをミュシャは民族的英雄として、何度も様々な作品に描いています。戦いで痛めつけられ悲しみ、苦しみつつ市民同士助け合い、いたわり合い、幻を抱いて、希望を失わずに歩む民の姿も描かれています。ミュシャは民族の魂と夢を描きたかったのでしょうか。



私はアウシュビッツを見学した帰りにプラハに立ち寄ることが出来ました。最初に旧市街の広場を訪ねると大きなヤン・フスの像が中央にありました。真夏で暑かったのでその像を見ながら、美味しいビールで喉を潤した思い出がありますが、ヤン・フスのことはあまり知りませんでした。今回、ミュシャの「スラブ叙事詩」をみて、ロシアの「専制君主ツァーリと農奴」の対比のような民族性ではなく、チェコには「知的リーダーと共に闘う市民」のような民族性を感じさせられました。もっとチェコを知りたいと思わせられました。音声ガイドでスメタナの「モルダウ」を聞きつつ、巨大な20枚を見た後で、お馴染みの、美しい華やかな、多彩な作品をたくさん見る事ができました。